

## 10 ビルマ人の葬儀と墓

高橋昭雄

現在日本の都市部では、土地の価格騰貴のため、住宅はもろろんのこと死んでから入るための墓を手に入れるのも困難な状況になってきているという。また都市部だけではなく農村部でも、結婚式がそうなくなってしまったように、葬式のパッケージ化が葬儀会社の手で進められている。ビルマ(1)にも葬儀社はあるが、霊柩車の賃貸が主な仕事で、葬式を取り仕切るのは集落の長老である。本稿は、このような長老の話をもとに、ビルマの葬式と墓について、おもに経済面から考察したものである。

## ●葬儀の手続き

人が死んでから遺族が行なう儀式、すなわち葬式の手続きについて説明しよう。ここでは、「スン(hsun)」をボンジー (hpoungyi 僧侶) に捧げる儀式が中心となる。「スン」とはボンジーに供する食物のことである。ボンジーは、俗人に対して涅槃にいたる道を自ら示す「仏陀の息子」として尊敬されており、この聖なる存在に供物を捧げることによって、ビルマ人仏教徒は功德を積むことがで

きるのである。スンは日常的に捧げられているが、葬式の時のスンには、死者が極楽に行けて、より良い状態で生まれ変われるようにとの、遺族の祈りが込められている。スンを捧げられたボンジーは、日本の場合のように遺族に尻を向けて仏壇に對してお経をあげるのではなく、遺族やその他の列席者に向かつて、輪廻転生の話や世俗での功德について説く。

まず死んだ日に行なわれるのが、「 Teppichawson (the'pyau'hsun)」である。Teppichawとは、命がなくなるという意味である。正午前に死んだらその日のうちに、午後死んだら翌日の午前九時から一〇時頃に行なわれる。ボンジーが少なくとも一人以上呼ばれ、葬儀の主催者は、ウットウー(wu'htu)と呼ばれる寄付金を寄進し、「スンチュエプエー (sun'kyelwe)」すなわちボンジーに食物を捧げる儀式を行なう。

死んだ日を第一日目と考えて、第三日目に行なわれるのが「ミエーチャスン (myeik'chawsun)」である。「ミエーチャ」とは、土に落とすという意味であり、埋葬する日に行なわれる。午前中にボンジーを呼んで、Teppichawsonと同じ要領で儀式を行なう。埋葬は午後二時から三時頃に行なわれ、大都市の市街地を除いては、土葬されるのが普通である。ただし、交通事故死のような突然死の場合、これを「青いまま死んだ」といい、骨が粉々になるまで焼いてから埋めることが多い。アウツラン・サヤー (au'tlan hsayá) と呼ばれる黒魔術師が、このようにして死んだ者の頭蓋骨や腕の骨を持ち去って、幽霊を作って悪事を働く、と信じられているからであるという。

死後七日たつと、「イエッレースン (ye'te hshn)」が行なわれる。イエッレーとは一週間という意味であり、このスンは初七日の供養である。上述の二回のスンと比べて、このスンが最も盛大に行な

われる。通常ボンジーは三人以上呼ばれ、ティラシン (tirlashin) と呼ばれる尼僧がそれに加わることもある。また前二者のスンは、身内だけで行なわれるが、このスンには、村中、あるいは町区の場合、町内②中の人が招待される。というより、呼ばれなくともやって来ることになっている。葬儀の主催者は、これらの人々に、モヒンガーという発酵させた米の粉で作った麺と、食べ茶 (tappe、ラベツ)、ペテル (kon kon)、入り豆などを馳走しなければならない。

葬式や法事に関する儀式はこれで終わりである。金持ちや社会的地位の高い人の中には、一カ月後に「ラレースン (lale sun)」(ラレーとは一カ月の意)、一年後に「フニッレースン (hnile sun)」(フニッレーとは一年の意)を行なう家もあるが、あくまでも例外であり、遺族の死者に対する義務は、「イエッレースン」で終わる。この例外も、一回忌が限度であり、日本のように三回忌、五回忌などは絶対にならない。

### ●費用

それではこのようなスンにどれくらいの費用がかかるのだろうか。以下ヤンゴン(旧名ラングー)近郊の一町内を例にとってみよう。まず、寄付金のウットゥーの相場は、ボンジー(僧侶)一人につき、最低一〇チャット(一チャットは日本円にして、公定で二二円、実勢で三円)で、スン(寄進する食物)の費用が「 Teppiyausun」と「Miee chassin」に関してはそれぞれ約五〇チャットかかる。「イエッレースン」になると、弔問客が多くなるので当然これだけではすまない。普通五〇ペイター(一ペイターは約一・六キログラム)のモヒンガーを用意する。モヒンガー一ペイター

の価格は、一チャットでそれにかける汁の価格が四〇チャットであるので、五〇ペイター分のモンガーを用意するのに、合計で二五五〇チャットかかることになる。これにラベツやコン代を入れると三〇〇〇チャットほどかかることになる。スン関係の費用の他に、棺桶代三〇〇チャット、それを担ぐ台座の代金一〇〇チャット、墓掘人夫代が二人分で六〇チャットそれぞれかかる。以上の費用は合計で、三六一〇チャットであるが、普通はボンジーをもう少し呼んで、ティラシン（尼僧）も呼ぶので、三七〇〇チャットと見積っておこう。

このような葬式の費用全てが個人の家計から支出されるわけではない。村や町内毎に、ターイエー・ナイエー・アティン (thayèi nayèi atin) という慶弔組合が組織されており、五人の世話役が、葬式代として一世帯あたり五チャットずつ集めることになっている。ここから八〇〇から一〇〇〇チャットほどの葬式代が出る。また、スンに來たボンジーや他の参列者に食事を振舞うための皿やスプーンなどの食器は、ボンジーの住む寺院から借りることができる。食器を借りたらそのボンジーを呼ぶのが原則であるが、そうしなくてもよいという。そして最後に、最も興味深い葬儀代の集め方が、博打である。ビルマでは賭博法によって一切の賭事が禁止されているが、葬式の場でのそれは大目にみられている。ビルマ人は博打が大好きで、国営競技場やバゴダの中というような、制度的宗教的に賭事とは最も縁の薄いようなところでも、博打が行なわれている。私がテニスに興味だと言ったら、テニスを知らない友人の一人が、一試合にいくら賭けるのかと即座に聞いてきて、びっくりしたことがある。誰もが好きだが御法度になっている博打が、死人が出た日から初七日までの一週間、誰に気兼ねすることもなくおおびらにできるので、死者が出た家にはたくさんの方が続々と集まっ

て来る。博打の種類はカード賭博、人々は夜も寝ずにカードで遊び、一晩で動く金は数万チャットにもなるという。葬儀の主催者はこのような人々から所場代を徴収して葬式の費用に当てるのである。ヤンゴン都下の町区の所場代は一晩六〇チャットが相場で、七日で四二〇チャットの収入になる。

ここまで葬式の収支を計算すると、収入が一二〇〇から一四〇〇チャット、支出が三七〇〇チャットであるから、二三〇〇チャットほどの赤字になる。私为中心的に聞き取りを行なった世帯は、月給が六〇〇チャットから八〇〇チャット程度の普通の公務員世帯であるから、葬式代はかなりの出費になることがわかる。

次は墓代である。大都市の市街地を除いて、都市周辺や農村部では主に二種類の墓が見られる。墓石のあるものとそうでないものとの二種類である。一般の人々は、死体をそのまま埋めて土をかけ、その上に竹で作った覆いをして、死んだ人の名前、享年および死んだ日付を書いた木製の札を立てるだけである(写真10-1)。死んだものはもうそこにはいないと考えられているので、その後その墓が再び顧みられることはない。すぐに草がはえてきて、木札が腐ってしまえば、もう誰の墓かもわからなくなってしまう。私が幼い頃、郷里ではまだ土葬が行なわれており、一度死体を埋めた墓を何年か後もう一度掘り返してまた別の死体を埋めていたが、この二人の死者には血縁的なつながりがあった。すなわち、たとえ土葬して土盛りしたただけであっても、一家の墓の場所は決まっていた。そして、火葬が義務付けられている現在、それぞれの家の墓所には〇〇家の墓と書かれた立派な墓石が立てられている。しかしビルマの場合、死体を埋めた場所に草がはえて木札が腐ってしまえば、誰の墓であるかわからなくなってしまうし、人々は墓の場所など気にもしないので、赤の他人が同じ場所に埋めら



写真10 - 1 一般的なビルマ人の墓



写真10 - 2 墓所代の料金表

大人25チャット、小人15チャット、グー250チャットと書かれている。

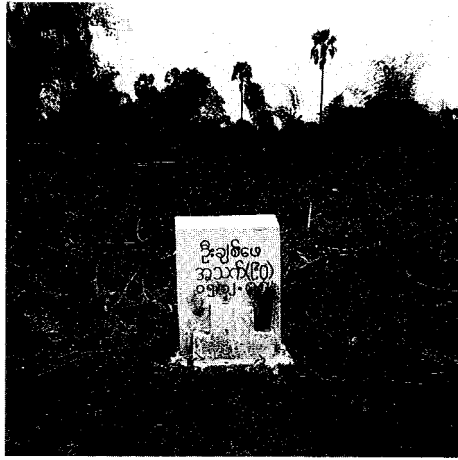


写真10 - 3 縦型の小さなグー

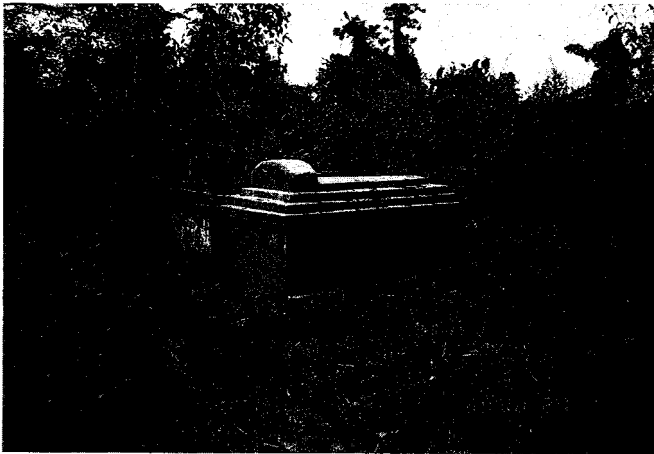


写真10 - 4 横型の大きなグー

れることになる。このような墓の場合、所有権や占有権が発生しないので、農村部では墓代は無料であるのが普通で、ヤンゴン市内のマヤンゴンというところでは、大人二五チャット、小人一五チャットと、だいたいタバコ一箱あるいは石鹼一個分くらいの値段であった(写真10-2の料金表参照)。

もう一種類の墓は墓石のあるものである。このタイプの墓は、墓所を恒久的に占有(所有するのは郡区)し、再び掘り返して埋めることができないので、墓代が高い。マヤンゴンでは、二五〇チャットと、ただ埋めるだけの墓の一〇倍に設定されている。墓石はグー(ဂူ)と呼ばれており、中国人の墓をまねたものである、と私の友人は言っていた。そういえば、中国式のバゴダもグーと呼ばれており、双方に語源的なつながりがあるのかもしれない。グーの様式は千差万別で、縦型の小さいもの(写真10-3)から、横型の棺桶のような大きなもの(写真10-4)まで色々ある。したがって、グーの価格もまちまちであり、五〇〇チャット程度のものから一万チャットもするものまである。私が訪れたことのあるフレグーの農村やヤンゴンの郊外の町区では、このような墓石を立てる家は、全世帯数の一〇パーセントにも満たないのではないだろうか。特に写真10-4のようなグーは、金持ちの見せびらかしのようなものである。しかし、このような立派なグーを立てても、中国人のように定期的に墓参りをするというのではなく、たまに掃除がなされればいい方であり、繁茂した草に覆われて見えなくなってしまうこともよくある。

以上述べてきたように、ビルマの場合、グーを立てるといふような特別なことをしない限り、墓代はほとんどかからず、管理費などはいかなる場合においても必要としないといつてよい。ただし、大都市の墓は例外である。日本人の墓もあるチャンドー墓地の場合などは、墓所を占有するための費用



が一萬チャットほどかかるという。六〇〇チャットから八〇〇チャット程度の一般公務員の月給ではとても手が出ない値段である。だが、どうしてもこのような高価な墓に入れなければならないという義務はなく、無料に近い価格で埋められるところがヤンゴン市内でさえいくつもある。日本の都市部で起こっているような墓不足の問題はビルマにはまだないといってよい。

以上述べてきたように、ビルマの葬式と墓を経済面から日本のそれと比較した場合、葬儀費用については相互扶助慣行の解体の程度が、墓代については土地の希少性の度合が、両国間では大きく異なることがわかる。大ざっぱな言い方をすれば、いわゆる都市化の進展度の差が両国間ではまだまだ非常に大きい。首都ヤンゴンでさえ、日本のどんな田舎の町よりも田舎っぽい感じがする。しかし、日本とビルマの葬儀と墓にまつわる慣習を比較する場合、来世感や僧侶の位置づけなど、経済面だけでは説明できない宗教上の相違が大きい。この側面からの葬儀や墓に関する考察がさらになされる必要がある。

## 〔注〕

(1) ビルマは一九八九年六月に国名をミャンマーに変更したが、私がビルマに滞在していたときはビルマであったこと、「上ビルマ」「下ビルマ」を「上ミャンマー」「下ミャンマー」に変更してよいか疑問であること、国名の変更は暫定政権によるものであり、総選挙後に成立するであろう新政権がこれを承認するかどうか未定であること、日本人にとっては「ビルマ」が使い慣れた呼称であり、日本以外の諸外国のマスコミは依然として「Burma」を使っていること等を考慮して、本稿では「ビルマ」を使用する。

(2) ビルマに行政区分は、中央から国、州または管区、郡、村落区または町区の順になっており、各レベルに行政機関が設

けられている。「村」や「町内」はこれより規模の小さい生活の単位である。